

(2)

一古い世代の画家の執念と同じよう、現代の絵画が亡びるとは思わないが、俳句みたいな、より一層個人に普及しながら、確実に稀薄化していくのではないかと思う。

力はなくとも、このデモの一員に参加しなくては!どうしても!その時間をツブせないという、使命感で絵を描く人達は多数いるが、片方の買う人、見る人は、おそらくというより、私の経験では、まだ一人も出会ったことがない。買う方の側は、画商、またはヒマツブンの金利以外で趣味の範囲を出ない。作者自身は餘剰の生活ではなく、ギリギリの生活者のクセ、生活のカテを餘剰の金で支えられるということの論理は、一体、どう解明出来るのだろうか。もし、そうだとすれば、早く俳句みたいに作品が売れなくなることだ。売れないことによって少なくとも侮蔑だけはまぬがれるからだ。まさしく現代の画家は本意ながらとはいえ侮蔑の生活を送っている。当然その関係は近代的商行為ほどの厳しさもなく、アヤフヤな契約とか、売りよう買いようの愛玩具の域を出ていない現状だ。あげくの果てが、真剣になったつもりである筈の作者自身が芸者的存在になってしまい、実生活の泡となりつつある。この現状に、果して、若い我々がガマン出来るだろうか。

その点からでも、九州派では、ショウ化することを五・六年前から考えていた。先ず、個人の作品を破壊することだった。一九五六年の第一回九州アンデパンダン展に出品された三つの作品に、まず意図だけは盛り込んだ。九州アン展を開く準備と読売アン展(東京のアン展は三月、一回九州アン展は六月)に対する態度で、当時の九州派は尖鋭化して、激論につぐ、激論の末、各人、ベニヤ板二枚をつないで一枚の絵を仕上げ、それを各人が持ち寄り、抽選により、バラバラに一枚の絵自身を二枚に分割即ちベニヤ一枚ずつに分けて、引き裂く方法で、それを巨大な一枚に仕上げる作品を作った。この作品はあまりに大きかったので、東京の読売アン展には出品したが、西日本の講堂、九州アン展には陳列出来なかった。同じように、三人ずつのグループにわかれ、共同の作品を作った。これは二組しか実現しなかったが、一つはゴミの作品で読売アンでは出品拒否され、そのまま九州アン展に陳列したしろものだ。もう一組のは、三人が各々、ベニヤ四枚の広さを受けもち、巨大なイメージの作品という共同課題に対し、イメージの拡大に従ってベニヤをつないでいき、結局十五・六枚をつないだ馬蹄型を逆にしたような変形的な、大きな作品だ。勿論、これも九州アン展に出品した。

その誰にも認められない輝かしい結果は、九州派自身が分裂することによって、各人の意識が明確になり、作家として逆戻りの線において出発する羽目におちいり、その後の九州派の分裂の原因となった。それ程、ショウ化の道はキビシク、県庁前に巨大な作品を並べた九州派、誕生当時においてすら、雨に濡れた作品、盗られてもよいという態度、毎夏張り替える障子の紙みたいに軽薄で、生活に密着した美術をと考えて出したものの、複数

の頭が納得するまでには相当の時間がかかった。そして納得するか、しないかが、ストレートに勢力の分野となったり、作家自身の態度となったが、当時は、九州派自身が無名であったので、内部は激動していたにもかかわらず、行動力はすばらしかった。

行動力にもものいわせて、地元ではあまりにもツマハジキにされたのと、会場難からとで東京銀座画廊と読売アン展を主な発表の場所として例年やって来たが、何度も読売アン展出品自体に対する激論が戦かわされた。

戦後、読売アン展が果たした役割は大いに認めるのだが、現在(五、六回以降) その制度自身、出品者の足を引っばる存在となっている。最初、九州派の中にも個人的に日本アン展に出品していた人が多いのが、どうして読売アン展に切替えたかという、壁面を売るという考え方が、われわれの実際の作品と合致したからだ。われわれの作品は一点としてより壁面をどう処理するかといった面の共同作品が多かったセイかも知れない。当時、針生一郎氏がアン展にグループで押し出すのは悪いことではないかというようなことを、なにかの雑誌に書いていたが、当時からその考えには反対だった。

なにはともあれ、あっても良いわけだがズバリいって美術館という強味より弱味の方が出て来たのが現状だし、出品するとしても その点のキオイは、ないのが実状だ。それ程実勢は進んでいる。進歩しているといつて悪ければ悪化しているのだ。読売アン展が美術館でやる以上、作家の生活のルートも現状維持だということもまた確かだ。

一どれだけの時間が経過したのだろうか。株式会社的グループの運営をやってみたり、所謂、オレ達の運動はタコの足を自らが食う自慰行為ではないか、さらば、焼酎でもこころゆくまで飲み、命をちぢめて早くアノ世に行くのが人様のためでもあり、ワガためでもありという、つまらない冗談が変に真実にみえたりしたが、去るものは去り、残る者は残り、好むと好まざるとに関らず、オレ達が 革命をやらねば、ダレもやらず、ノタレ死だけだと判った九州の空は雨がドシャブリの水害の季節だった。それから一年後、一九六二年十一月、即ちことしの秋、九州博多で一大ショウをやることになった。去年の八月九州派東京展の時、発表してから一年目だ。発想、激論してから二年目、色々なことが討議されたが、石垣の石は巨大ではなかった。だが封建時代の経済力ではなかなか破壊されない程強大ではなかったかという事実という意味でもないが、われわれは軽卒な男になろう。軽卒なネオ・ダダイストとは、どうかなという声、イカレタ世界の集いなど。ダメな作家がダメになる時、所謂、ダメなんだからウエタ男達の暴動にも肖て、拘置されることの方がタノシシが多い種族の繁殖を計ることと同時に泥棒、同性愛、強盗などすべての反社会分子を糾合し、一大エネルギーを生むこと、これが眼であり、作家の姿勢であるべきなのだが、革命とはノゾまずしても迫りくるもの、わが身の反社会の臭いがコワイ革命を

呼ぶ……。とすればそれは、なんとコワイトコロダロウ。

所詮、馬鹿な約束を守る男とは九州派の男と女達のことだろう。少タイカレてはいるがパリ、ニューヨーク程ではないことは確かだ。まだ、まだオレの舌は焼酎の味を分けることが出来る。三十五度の焼酎の味を!

こと程、サヨウに軽卒な者どもを守るのか、攻撃するのか、とにかく彼等にはまだ作品と呼ぶものがあるのだろうか。

スリラーものでは最後まで結末をフセておくが、しかしそこには確かに作品があるとだけいっておこう。反外面宣言を出さざるを得ない程のセツパツマツタものと思うなけれど。しかし内側に興味を持つグループであることだけは確かだ。古い人には「魂を奪われた反外面的作品」をどうぞといい、同世代には「いかれた、ダメな作家達の大集会のための記念品持参」でどうぞという大集会なのだ。

それを九州博多でやります。一九六二年十一月十五日に。その時はじめて素朴にあって生活手段と表現が一致するキッカケをつかむことになる筈だ。その事実が如何に小さくとも、それは確実に拡大して行き、望むと望まざるとにかかわらず、確実に選ばれ意味づけられて城壁は強固にハリメグラされ決戦は挑まれ、異質の城が。その時、オレ達はオレ達の芸術をオレ達流儀で売ったお金で、こころゆくまで焼酎をのんでいる筈だ。